



存在と記憶の
距離感

オーバーリン
第四話

高校生になって（正確には中学三年生の終盤だったかな。中高一貫校だったから。）僕は柔道部に入部した。そして、練習漬けの毎日を過ごすようになった。練習の度に先生にどやされながら、ただひたすらに技の打ち込み練習をし、乱取りでは90キロ超級の大男たちに投げ飛ばされ続ける。それが僕の日常になった。練習が終わばと精も魂も尽き果て、真っ直ぐに家に帰り、ベットに倒れこみ、眠った。目をつむったかと思うと、瞬く間に朝がやってきて、起きようとするすると全身が筋肉痛、金縛りにあった様になかなか動けなかった。

毎日が目まぐるしく過ぎ去り、あっという間に一週間が経ってしまう様になった。僕はもりもりと飯を食うようになり、目に見える程に体つきが変わっていった。胸板が厚くなり、肩幅が広がった。精神の方まで鍛えられたのかどうかは定かではなかったが、明らかに肉体は逞しく変化したのだ。僕はその事が嬉しくてたまらなかった。その喜びから、僕はますます練習に没頭した、と書けばカッコいいのだろうが、真実はそうではないのである。肉体の進化は嬉しかったが、練習の方はちょっと筋肉がついた程度でその苦しさが軽減される様な甘っちょろいものでもない。相も変わらずに苦痛そのものであった。

僕はその性格的に、耐え忍ぶとか、地道にとか、そういった性質の努力が大の苦手な人間であった。そのため入部して三カ月もすると、新しい事を始めたという新鮮さもすっかり消え失せて、急激な肉体の進化もそのスピードが緩やかになり、僕はすっかり柔道に対する情熱を失った。「俺はもう十分に強くなった。」と、甚だ傲慢な勘違いをして、努力をしない口実にした。そもそもが軟弱者なのである。しかし、そんな気の抜けた態度はすぐに練習態度にも反映され、僕は顧問の先生に目を付けられるに至った。「目を付けられた」と書くと何だか期待されているという様なニュアンスを含みがちだけれども、僕の場合にはそのようなニュアンスは全く無く、ただ「忌み嫌われ、しごかれた」と表記する方が正確かもしれない。

こうなってしまうと、僕は練習が嫌で嫌で堪らなくなり、学校に行く事さえも嫌になってしまった。こうして僕の退部までのカウントダウンが始まったかの様に思えたのだが、この柔道部の顧問は学校内では絶大なる権力を有しており、柔道部を止めた生徒に対しては冷徹極まりない態度でもってそいつを苛め抜く事で有名だった。つまり、退部＝残りの学校生活は地獄という方程式が出来上がっていた。つまり、入部三カ月で辞めたくなくなってしまった僕の場合、残りの二年半以上を奴につけ狙われる事を覚悟の上で辞めなければならないのである。

当然の事ながら軟弱者の僕がそんな根性と精神力とを持ち合わせているはずは無い。つまり、辞められる訳がないのだ。顧問の野郎も僕のそんな心理状況を見透かして、

「てめえ、辞めたいんならいつだってやめていいんだぞ。」

そう言って、僕に次々に腕立て伏せ等の肉体的拷問を強要し、僕の繊細極まりない神経は奴によるストレスでズタボロにされた。

結局、僕は高校二年生の冬に引退するまで（つまりは最後まで）柔道部を辞めなかった。最後まで顧問とはウマが合わず、嫌われっぱなしだった。その嫌い様と言ったら半端ではなく、ほとんど憎んでいるの域に達していたと思う。それを端的にあらわすエピソードとして、引退に際して顧問が僕に対して放った言葉を紹介しておこう。

「今後、お前の人生は全部失敗する。大学受験も絶対に落ちる。何故ならお前は人生をなめているから。」

これが奴の僕に対する門出の言葉である。ちなみに大学受験は現役で合格し、奴の予言は見事に外れた。

僕の柔道部での苦労話を書き始めたらきりが無いが、それを書いていると別の話になってしまうのでやめておこうと思う。がとにかく、ご本大好き少年の僕は、柔道部の高校生活を通して体育会系のノリの何たるかを身をもって体感し、耐え抜き、そして自分のスタイルには合わんと悟った。

えーっと何の話してたんだっけ。そう、高校で柔道部に入ったんだけど即効で飽きた所だったね。そう、大変だったんだよ。そんなもんだから、当然真希と会ってる時間も無くなっちゃって、最後の一人だった僕までも彼女から気持ち離れて行っちゃってた。薄れていったって言うか、忘れちゃってたんだよね。頻りに連絡を取り合う事も無くなっちゃってさ。

折りも折、そんな折、真希から一通のメールが届いた。

「おはよー。なんだか最近会ってないね。忙しいのかな。あのさ、蘭がヒロトのアド教えてって言うから、教えちゃってもいいかな？」

こんな文面だった。今まで書いてなかったけど「ヒロト」は僕の名前ね。

すぐに、

「教えちゃっていいよ。」

と返信した。でも、なんで俺のアドレスなんか知りたいんだろう、と不思議な気分だった。蘭と最後に会ってからずいぶんと（数か月）時間が経っているし、そもそもその時だって僕と蘭は殆ど話さなかったのだから。蘭が僕に対して興味を示す理由が見当たらなかった。

でも僕は真希に

「教えちゃっていいよ。」

と送った。僕と蘭の間には関係性が何もなかったから、当然だけど拒む理由もなかったのだ。考えてみれば、これが蘭から僕へのファーストアクションな訳で、やっと始まったんだと考える事も出来る。

「蘭はどんな子なんだろうか。」

それを思い、ちょっと知りたくなって、「不思議だ」と感じる心が少し「知りたい」という楽しみに変わった。

真希に返信してから小一時間して、蘭からのメールが僕の携帯電話に届いた。いつメールが届いてもいいように、携帯をジーンズのポケットに入れてあったから、携帯はブルブルと僕の太股を震わせてそれを知らせた。

「こんにちは。蘭です。

ひさしぶりだね。

いきなりメールしちゃってゴメンね。

よろしくね。

ヒロトは高一になったんだよね。

部活は決まった？」

こんな感じの文面だった気がする。けど、覚えていない。違っているかもしれない。もしかしたら、記憶を捏造してしまっているかもしれない。でも、思い出せないのだから仕方がない。捏造もひっくるめて話を進めていくしかないだろう。ただ、ここで言うておきたいことがある。本当は覚えているのに、故意に違う風に記憶を捏造する、という様な事は一切しない。本当に思いだせない時に限り、已む無く、

「こんなんじゃないなかったっけな。」

と想像して補うにとどめる。

とまあとにかく、蘭からの初メールが届いた訳だけれども。僕は文章を読んでいる時、脳みその中で誰かがその文章をナレーションしている。声になって読み上げられて初めて、意味として頭に入ってくるのだ。で、その文章が直接知っている人間の書いたものである時は、僕の脳内ではその人の声でナレーションが行われる。知らない人間のものである場合は、想像上のそいつの声でナレーションが行われる訳だが、面白い事に作家ごとにそれぞれ違う声でナレーションが行われる。その文面から読み取られるイメージが声に変換されるものだから、それぞれ作家ごとに違う声になるんだろう。だから、面白い事に、僕がある特定の作家の事を思い浮かべる時、まず初めに、その人の本の作品名でも文体でもなくって、僕が勝手に作りだしたその人の声が聞こえてくるのだ。で、僕の好きな作家はその人の声にも愛着を持っている。嫌いな作家は、声が気に食わなくて嫌いになっちゃったのかもしれないな、なんて思う。

蘭とはメールでやり取りすることが多かったから、当然ながら僕の中には蘭のメールの声というものが存在する。そして、この蘭からの初メールを読んだその瞬間に、その声は作られた訳だ。どんな声だったろうか。甘ったるくて、ぶりっ子っぽくて、どこか誘ってくる様な、そんな声だった気がする（これじゃ分かんないよね）。でも

、当の本人とはほとんど喋ったこと無いから、本当はどんな声しているのか分かんない訳。だから、僕にとっての蘭の声は「メールのナレーションの声」と「実際の声」と二つの声があるっていう不思議な状態だった。そして今、こうして蘭の事を思い出そうとすると、なんだか聞こえてくるのはナレーションの方の声だ。

それから暫くは蘭とのメールのやり取りが続いたのだが、実際に蘭に会って話すまでの間、僕は自分の創り出した蘭の声とお喋りをしていた事になる。僕は蘭とどんなメールをしたんだろうか。一つ一つは覚えていない。「どんな音楽を聴くんだ」とか、「今テレビ見てる」とか、そんな他愛もない内容だったと思う。それでも僕達は一日に何通も、次第に何十通も、メールのやり取りをした。

メールでの蘭は実物の様に静かじゃなくって、饒舌で、エッチな話が好きだった。初めからそうだった訳ではないのだが、一週間位してそうなった。

「ヒロトは今付き合っている人いるの？」

「いないよ。」

「今までに付き合ったことある？」

「ないよ。」

「あたし、童貞の人が好き。」

こんな感じのやり取りが蘭の下ネタメールのはしりだったと思う。僕に気があるという事を伝えたかったのか、やたらと文末にハートマークが付けられていた。でも、単に発情していただけなのかもしれない。

「童貞」という言葉を使う位ならまだ可愛いものだったのだが、彼女の下ネタは次第にエスカレートしていった。

「今、買い物してるんだ。」

「ふーん。何買ってるの？」

「パンツ。」

「ふーん。」

「ねえ、ヒロトは水色と黒、どっちがいいと思う？」

「うーん、水色かな。」

「じゃあ、そうしよう。」

まだ、付き合ってもいない男にそんな事を聞くのは変ではないだろうか、というその当時の僕の思いが文面に表れている。

極めつけのやり取りを紹介しよう。メールを初めて二週間くらいが経っただろうか。夜中、家族も寝静まった頃、蘭からメールが来た。

「起きてる？」

「起きてるよ。」

「何してたの？」

「部屋で本読んでた。」

「ふーん、ヒロトはオナニーしないの？」

「するけど。」

「蘭ね、今、オナニーしてるんだ。」

この時点で、僕はゲンナリした。最近下ネタメールが多かったとはいえ、ここまで露骨に言われては、多感な少年の純真さも行き場が無い。

「そうなんだ、気持ちいい？」

シカトするのもあれなので、一応聞いてあげてのだ。すると蘭は

「うん。気持ちイイよ。アッ、アンっ。ねえ、蘭のオマンコ見たい？」

と返信してきた。完全にその気だ。喘ぎ声まで打ってある。オナニーしながら自分の喘ぎ声をメールするのってどんな気分なんだろうか。打ってて白けたりしないのかな。僕は、はっきり言ってドン引きしていた。が、ここで

「別に見たくない。」

と返信したら間違いなく蘭は傷つくだろう。恥を書くだらう。それは可哀想だ。それに女のオマンコはどんな風になっているんだろうか、興味が無いと言えようそになる。

「うん、見たいよ。」

そう返信する。と、一分足らずで写メール付きのメーが来た。

「はい、蘭のオマンコだよ。ねえ、まだピンクなんだよ。どう？」

その文面と共に添付された写メールには、オマンコがドアップで写っていた。こうして僕は人生初オマンコを拝んだ訳だが、それはエロ本に書かれている様な素晴らしい代物には見えず、特に感動はしなかった。オマンコはオマンコという「物」だった。本当に、その時のオマンコはただの「物」にしか見えなかった。愛でべきものでもなく、特別な思い入れを持つ対象にはなりえず、その奥には愛とやらも、恥ずかしさも、胸キュンも、この女となら死ねるという決意も、

無く、
どんな精神性も持ち合わせてはいなかった。「物」そのものに、僕は何も感じる事が出来ず、その事が悲しくさえもあった。僕が女の子に求めていたのは「物」ではなくって、弱さとか、涙とか、愛しいだとか、そういった精神性の方だった。その当時、尾崎豊を聞いて、村上春樹を読んでいた。彼ら表現者が奏でる「愛」と、目の前のディスプレイに表示されている「オマンコ」との間にはあまりにも大きすぎる隔たりがあった。

蘭は僕が喜ぶと思って、一連の下ネタやらオマンコ画像やらを送ってくれたのだら

うが、僕としてはそれらを見せられる度に、違和感を感じ、距離感を感じずには入れなかった。だから、はっきり言って、僕は蘭のオマンコ画像を見てひどく傷ついてしまったのだ。

「僕はこんな「物」が見たい訳じゃない。」

と。

「僕を馬鹿にしなしてくれ。」

と。なんだか蘭が汚らわしいものの様に感じられたのを覚えている。

今思うと、この一連の僕の「感想」というのは、一重に僕の「幼稚さ」を表しているし、それゆえの「傲慢さ」を表している。幼かったのだ、単純に。だから、女の子が、というよりは人間は「物」であるという一つの側面を受け入れる事が出来なかった。で、愛だとか精神だとか、そういった目に見えない類のものばかりを求めすぎていて、それだけが崇高だと思い込んでいたのだ。また、それゆえの

「崇高なものを求めている俺は崇高。」

という典型的な、そして間違いなく愚かなナルシズムにも陥っていた。

今現在、22歳の僕は未だに「愛とは」とかそういった類の問題に対して、偉そうな見解を述べる事は出来ない。がしかし、16歳の頃に求めていた「純粋な愛」とやらとまったく同じ性質のものを未だに求め続けているかと聞かれれば、そうではないと思う。まったく違っているのかと言え、またそういう訳でもないんだが。

「やりたいだけか。」

という紋切り型の質問があるが、やはり、それだけではないんだろうなと思うんだ。でも、

「はい、これが愛です。」

と手にとって差し出して、見せる事の出来る代物でもない、とも思う。精神は肉体に宿る、じゃないけどさ、「物」ってそんなに矮小なものではないと思うんだ。好きな女の子の「おっぱい」が愛しいというのは自然な感覚だろうし、それを疑ってみても仕方がないだろう、と思うんだ。だから、それこそさ、飲尿プレイだとかスカトロだとか、そういうさ、いわゆる変態プレイみたいなものってさ、どうしてもタブーになっちゃっているとは思っただけど、

「めっちゃ好きだったら、その子のオシッコを飲めるかもしれない。「飲める」というよりは「飲みたい」と思うかもしれない。」

そう思ったりもするんだ。シヨンベンさえもっていう愛もあるんだろうなっていう。で、それはすごい愛なんだろうな、って。まあ、僕はしないけどさ。

話がどこかに飛んでしまった。そう、僕はオマンコ画像に返信しなきゃならんのだった。

「どう？」

と聞かれて、

「「物」ですね。」

って答える訳にもいかんしな。

仕方が無く僕は、

「綺麗だね。」

と返信する。がこういう時にそれ以外の答え方があるのだろうか。この無言の圧力と言うか、思考停止の強要と言うか、そういうものに僕はいつも怒りを覚える。でも、いざ自分の身にそういった同調圧力が降りかかると、それに屈してしまう事も多い。そんな自分にも腹が立つ。

まあ、今はそれはいいや。最近それまくってるしな。

そうこう言っているうちに蘭から返信が来た。

「ヒロトのチンコも見せて。」

絶句。

絶句である。もう、言葉は出ないのだ。だから、何も考えられない。ただ、蘭に恥を搔かせてはいけない。もう、それだけである。携帯のカメラを起動し、パジャマのズボンを下ろす。が、現状としてフニャンとしている僕のチンコを撮って送る訳には行くまい。男としての沽券にかかわる、というより何より、彼女が求めているのはそれではない。という事で仕方なくシャカシャカと始める。

一分後、僕は何とか元気にしたチンコの撮影に成功し、それを蘭に送る。と、即座に返信が来る。

「ヒロトの大いイイい。イイい。」

耐えきれず、笑ってしまう。画面からでは大きさは判定できないはずだし、温泉に行けば分かる、俺のは並以下だ。が、それよりも何よりも、この文面、そしてそれを打っている彼女の姿が思われて、吹き出してしまう。

その後、蘭は文面上でイキ（あまりに陳腐なのと、もう書きつかれたので具体的には書かない）、無事眠りについた。

その当時も今も、不思議でならないのは、一体蘭はどのような心理からこのような行為に及んだのかという事だ。分からん。考えて分かるなら、とっくに分かっている

はずである。あまりに分からないので、友達にこの話をする時には「真性の淫乱だった。」とか「気がふれていた。」とか言って説明しているが、どうもその説明ではしっくりといかない気がするのだ。まあ、おいおい考えていこうと思う。

存在と記憶の距離感 第四話

<http://p.booklog.jp/book/21136>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21136>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21136>